語物氏源

詳說的一冊

六卷

山田孝雄 校閲
谷崎潤一郎 新譯

源氏物語

巻六

中央公論社

新譯源氏物語普及版卷六奥附　昭和三十一年十一月一日印刷　昭和三十一年十一月五日發行
譯者谷崎潤一郎　校閲者山田孝雄　發行者栗本和夫東京都千代田區丸の内二の二　印刷者長久保慶一東京都新宿區市谷加賀町一の一二　發行所中央公論社東京都千代田區丸の内二丁目二番地丸の内ビルディング五九二區
定價二百五十圓

新譯源氏物語卷六目次

寄生……一
東屋……九九
浮舟……一六九
蜻蛉……二四七
手習……三一一
夢浮橋……三八五

老生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

寄生

イ、その頃とは椎本の巻の初め頃を指す
ロ、ハ、此の左大臣は誰であるとも姓名は記してないが梅枝三三〇頁に「先づ左大臣殿の三の君がお上りになりました。麗景殿とお呼ばれになります」とある、その左大臣のことなるべく、その時の麗景殿女御が後に藤壺に移つたのであらう
ニ、后にもなれなかつたことを指す
ホ、これは中宮の腹に生れた姫宮である

イその頃藤壺と申し上げましたおん方は、故左大臣殿からお上りなされた女御でいらつしやいました。今の帝がまだ春宮でおいでになりました時分、ほかのお方より先に入内なさいましたので、親身にいとしう思し召していらつしやいますことは、格別のやうにお見えになりましたけれども、それが表向きに現はれるやうな出來事もなくて年をお過しになりますうちに、中宮には宮たちさへ多くお生れなされまして、追ひ〳〵御成人なさいますのに引きかへて、此方は左様なこともあまりおありにならないで、たゞ女宮一所だけを儲けておいでになりました。御自分が人に壓し負かされてしまつた宿世が、いかにも殘念で歎かはしいので、その代りにはせめて此の姫宮を、何とかゆく〳〵胸が晴れるやうなお立派なお方にして上げたいと、竝々ならず大切になすつていらつしやいます。お姿形もたいそう美しくていらつしやいますので、帝もお可愛らしいものに思つていらつしやいます。ホ一宮を世にたぐ

ひもなく扱うて上げていらつしやいますので、一般の人氣と云ふ點でこそ、及ぶべくもありませぬけれども、内々でのおん有樣は、殆どそれに劣るところはありませぬ。父大臣の盛んであつた御威勢の名殘が、まだそんなには衰へてをりませぬので、別に御不自由なことなどもなく、侍ふ女房たちの器量やなりふりから始めて、怠りなく、季節々々に從つてお調へになりまして、當世風に、趣深くお暮しになつていらつしやいます。十四にならせ給うた年に、おん裳着の式をお擧げになると云ふことで、春から支度におかゝりなされて、餘事をさし措いて準備をお進めになりまして、何から何まで特別結構になさいます。おん里方に古くから傳はつてゐました寶物などを、かう云ふ折に使はなければと搜し出したりしまして、たいそうなおん營みなのでしたが、ふと、夏頃に女御が物怪にお惱みになりまして、たいそうあつけなくお薨れになりました。悔んでも何の甲斐もなく、口惜しいことにお思ひになりまして、内裏でもお歎きになります。御性質が情深く、優しいところがおありになつたお方ですから、殿上人たちも、「これからはひどく淋しくなることであらう」と、殘念に存じ上げます。それ程位置の高くない普通の女官など迄、お慕ひ申さない者はないのです。宮はましてお若い身空の、心細さやら悲しさやらで滅入り込んでおいでになるとお聞きになりまして、お上も不憫に可哀さうに思し召して、四十九日が過ぎた時分に、内々で内裏へお呼び寄せになります。日毎にお部屋を訪れ給うて、おん眼をかけてお上げになります。黑いおん衣でお窶れになつていらつしやいますのが、ひとし

ほいぢらしく、上品さが增したやうにお見えになります。御氣象もまことに大人びていらしつて、母女御よりも今少ししとやかに、落ち着いた感じが勝つていらつしやいますところなど、頼もしいとは御覽になるのですけれども、その實おん母方と云つても、後見としてお頼りになる伯父と云つたやうな、しつかりした人もないのです。わづかに大藏卿とか、修理大夫とか云はれる人があるにしましても、それとて亡き女御の腹違ひの兄弟であるに過ぎませぬ。殊に世間から尊敬されてゐるのでもなく、重くもない身分の人々であるのに、左樣な者共を力にして世に立つて行かれるのも、女の身としてどんなに苦勞が多いであらうか、考へてみれば可哀さうなと、お上は御自分の外にはお世話をして上げる者がないやうにお案じになりますのも、大抵なことではないのでした。

お前の菊がまだすつかりは色を變へずに美しく咲いてゐます頃、空のけしきもしんみりとして時雨れてゐますにつけても、先づ此の宮のおん許に渡らせ給うて、亡きおん方のことなどを仰せられますと、おん答へなども、おつとりとしていらつしやりながらもはき〳〵と申されますので、いぢらしくお思ひになります。誰か、此れ程のみめかたちを見知つてくれて、可愛がる人がないことはあるまい、朱雀院があの姫宮を、六條院の大臣にお預け申された折の御配慮などを考へてみても、當座の間は、あんなことをなさらないでもよいではないか、外になさりやうもありさうなものをと、申す者などもあつたけれども、あの源中納言と云ふ諸人に優れた人があつて、あゝして何くれとお世話申し上げてゐ

イ、女三宮、薫の母

ロ、薫

るところから、あの母宮も昔に變らぬ聲望を保つて、結構に暮してをられるではないか、さうでもなかつたら、隨分ひよんな間違なども起つたりして、自然と人に侮られ給ふやうなことがあつたかも知れない、などゝ思ひつゞけ給ふと、兎も角も御在世の間に、緣づけてお上げになりますのに越したことはなく、扨さう考へて御覽になりますと、母宮の例をそのまゝに、その今も云ふ中納言に引き請けてお貰ひになりますより外、恰好な人は又とないのでした。全く、あれなら宮たちの傍に並べてみても、何一つとして恥かしいところはないのであるし、外に思ふ人を持つてゐたとしても、まさか外聞の惡いやうな扱ひ方はしないであらうし、それに結局本妻と云ふものがなしでは濟まされないのであるから、他からの話がきまらないうちに、そんな風に仄かしてみたらなどゝ、をり〳〵考へておいでになるのでした。姫宮とおん碁をお打ちなされて、日の暮れがた、時雨が面白く降ります時分に、菊の花にも夕映えがしてゐますのを御覽になりまして、人を召して「只今殿上に誰々がゐるか」とお問ひになりますと、「中務親王、上野親王、中納言源朝臣が祗候してをります」と奏上します。「中納言の朝臣をこれへ」と仰せ言がありますので、お前に參上なさいます。ほんに、かうして特にお呼び出しになりますだけあつて、遠くの方から匂つて來ます薫を始めとして、人に異なる樣子をしていらつしやいます。「今日の時雨はいつもよりも殊に長閑な感じがするが、今は管絃の遊びも如何ではあり、ひどく無聊に苦しんでゐるので、かう云ふ退屈な時を紛らす慰みには、これが一番よいであらう」と

イ、これはまだ宇治の大姫君が存生中の話なりと知るべし

ロ、今は女御の喪中だからである

仰せなされて、碁盤を召し寄せて、お相手をお命じになります。と、いつもさう云ふ風にして、お側近くお召しになりますのに馴れてゐますので、今日もさうなのだと思つてゐますと、「よい賭物があるのだけれども、迂闊には渡せない、外に何ぞないものか」など〻仰せになりますので、どう云ふ思召と取つたのでせうか、いよ〳〵心づかひをして畏まつていらつしやいます。さて勝負をなさいますと、お上が三番に二番お負けになりました。「くやしいな」と仰せなされて、「ではまあ今日は此の花を一枝遣すぞ」と仰せになりますので、默つて御階の下に下りて、風情のある枝を折つて、お前に戻つていらつしやいました。

世の常の垣根に匂ふ花ならば
心のまゝに折りて見ましを

と奏し給ふのが、いかにもお嗜みが深く見えます。

霜にあへず枯れにし園の菊なれど
のこりの色はあせずもあるかな

と仰せられます。

から云ふ風に、何かの折には仄かし給ふ御氣色を、人づてゞなく拜んでゐながら、例の因循な癖がありますところから、飛びつくやうには思ひもしませぬ。もと〳〵自分の本意と云ふのでもないのだし、

〻、開得園中花養レ醜。請君許レ折二一枝春一。〔和漢朗詠集戀〕

三、「普通の家の垣根に咲く花であるならば、思ふまゝに折つて見ることが出來ませうものを」で、暗に女二宮のことを心に思つてゐる歌

四、霜に堪へられないでいろ〳〵の草が枯れてしまつた園の菊であるけれども、霜の後にも色はあせず美しく見えることよ。「枯れにし園」は藤壺。「菊」は女二宮のこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

今までにもいろ〳〵と結構な話があつたのを、體よく聞き流して年月を過して來たのに、今更世を逃れた者が再び俗に還るやうな氣がするであらうなどゝ思ひますのも、妙な性分なのですが、取り分け此の姫宮のために心を碎いてゐる人もあることは知つてゐながら、心の中で、此れがまだしも后腹のおん方でゞもあるならばなどゝ、あまりと云へば分不相應なことを考へてゐるのでした。[イ]左の大殿はそんなことをお聞きになりますと、六の姫君を何としてゞも此の君に緣づけよう、眞心を籠めて頼みさへしたら、澁々ながらでもしまひには否とは云ひきれまいと思つていらつしやいましたのに、思ひも寄らぬことが起つて來さうなのを、妬ましくお感じになるのでしたが、それならそれで、兵部卿宮とても、さう御執心と云ふほどではないにしてからが、折々につけて興あるおん文を絶えずお寄越しになることであるから、よしや一時のお戯れに過ぎなかつたにしたところで、然るべき宿緣があつてお氣に入らないものでもあるまい、「水も漏らさじ」と打ち込んでくれる相手があつても、尋常人の許へ嫁ぐのであつたら、世間體も惡いし、物足りない心地がするであらうなどゝ、考へるやうにおなりになりました。そして、「年を取つて參りますと、兎角娘どもの行末のことが案じられてなりませぬが、お上でさへ聟君をお搜しになる世の中でございますものを、まして臣下の女子などが、盛りを過してしまひましたら仕樣のないことになります」などゝ、不平さうに仰せになりまして、中宮にも眞顏で怨みごとを申されますことがたび〳〵になりましたので、お持ちあつかひになりまして、「ま

イ、これは夕霧左大臣のこと

ロ、などてかくあふどかたみになりにけん水漏らさじとむすびしものを（伊勢物語）

あ氣の毒に、もう長い間あゝして一生懸命に心を寄せてをられますのに、意地悪く逃げておいでになるのも、情を知らぬやうではありませぬか。親王たちは立派なおん後見があるないに依つて、よくも惡くもなるものです。お上も只管御讓位のことをお洩らしになつていらつしやいますが、臣下であればこそ、一旦定まつた人が出來ると、外に心を分ける譯にも行かなくなります。それでさへあの大臣などは、あんなに眞面目さうに見えながら彼方此方を巧くあしらつて、孰方からも恨みを受けないやうにしてをられるではありませぬか。まして、かね〳〵思つてをりますことでも叶ひましたら、幾人側へお置きになつても、何の差支へがありませう」などゝ、いつになくいろ〳〵とお話しになりまして、さうした方がよいと云ふ風に申されますので、宮のお心持としても、もとより達てお厭な譯はないのですから、何もさう無理矢理に斷つてしまはうとはなさらないのでした。たゞたいそう慇懃な、堅苦しいあたりに閉ぢ籠められて、今迄は氣儘に振舞つていらつしやいましたのに、急に窮屈な目にお遭ひになりますのが、何となく辛くて、氣がお進みにならないのですが、いかさま、此の大臣にあまり恨まれ通すのも不利であらうと云ふ風に、だん〳〵とお心が折れていらつしやるらしいのです。が、さう云つても浮氣なお方のことですから、あの按察の大納言の、紅梅のおん方のことをも、未だにお諦めにならないで、花紅葉の折々につけてお云ひ寄りになつたりしまして、いづれをも床しく思つておいでなのでした。

〈、今上が今の春宮に位を讓れば、或は匂宮が春宮になれるかも知れないのである

〉、雲井の雁と落葉の宮とのこと

さ、故致仕大臣の二男、柏木の弟、竹河の卷以來有大臣の筥であるが、分り易いやうに前の官名で書いたのである

〈、眞木柱の腹の、螢兵部卿宮のむすめ。有大臣の養女。委しくは紅梅の卷を見るべし

イ、薫廿四歳。早蕨の巻の春に同じ。此の前年の冬宇治の大姫君が亡くなり此の年の二月中姫君が京へ出ることなどあるべし

するうちに、年が改まりました。中納言の君は、今は女二宮のおん服もお濟みになつたことですから、いよ〳〵何の御遠慮なさることがありませう。「お上も此方からお申し出でがあつたらと、お心待ちにしていらつしやるらしうございます」と、お知らせ申し上げる人々もありますので、あまり知らず顔をしてゐますのもひねくれてゐるやうで失禮であるしなどゝ、氣をお引き立てになりまして、何かのついでにはそんな素振をお見せ申し上げるをり〳〵もありますので、何でお上がお許しにならない筈がありませう。もう御祝言のおん日取なども、ほゞいつ頃と定めていらつしやるらしく人づてにも聞き、自分でも御氣色を悟つてゐるのですけれども、心のうちでは矢張惜しくもお亡くなりなされたおん方のことばかりを、いつ迄たつても忘れやうもなく悲しく感じてゐますので、あゝほんたうに、こんなにまで因緣の深かつたお人が、どうしてあのやうに、夫婦の契を許さずに逝つておしまひになつたのであらうと、思ひ出しては合點が行かないでゐるのです。身分の賤しい女であつてもかのおん面影に少しでも似通つてゐる者なら、心も惹き付けられるであらうものを、昔あつたと云ふ反魂香の煙の中にでも、今一度お目にかゝることは出來ないものか知らんと、そんな風な氣ばかりして、やんごとないおんあたりとの御緣組のことは、早くしたいと云ふ心も起きませぬ。

左の大殿はお急ぎになりまして、八月頃に式をとお申し出でになりました。二條院の對のおん方はそれとお聞きになりますにつけても、さればこそ、どうして添ひ遂げることなどが出來よう、自分など

ロ、中姫君

は數ならぬ者であるから、きつと人に笑はれるやうな情ないことが起るであらうとは、思ひ〳〵今日まで過して來たのであつた、浮氣つぽい御本性と伺つてゐたので、あてにならぬお方と思ひながらも、お目にかゝればさう情ないやうなお扱ひもなく、いつもしみ〴〵と堅いお約束をして下さつたのに、俄に仕打をお變へになるのだつたら、どうして安閑としてゐられよう、下樣の男女の間柄などのやうに、全く切れてしまふやうなことはないとしても、どんなにこれからは苦勞が多いことか知らん、矢張自分は不運に生れついてゐるのかして、遂には山里へ舞ひ戻るやうになるのであらうなどゝお思ひになりますと、初めからあのまゝ田舍にゐて埋れてしまふよりは、歸りを待つてゐる山樵どもの手前も體裁が惡く、かへす〴〵も父宮の御遺言に背いて草の庵を出てしまつた輕々しさを、きまり惡くも辛くも思ひ知り給ふのです。故姉上は、うはべはいかにもしまりがなく、たわいがないやうな風にばかり、何事につけても見せかけておいでになつたけれども、心の奥底は何とまあしつかりしていらしつたことよ、中納言の君は未だにお忘れになれないで歎き續けていらつしやるやうだけれども、もし姉上が生きながらへておいでになつたら、又私と同じやうな思ひをなさることがあつたかも知れない、それを思慮深く、どうかしてさうなるまいと決心しておいでになつたればこそ、何としてゞも男君から遠ざかるやうにとお努めなされて、尼にならうと迄なすつたのではないか、だから達者でおいでになつたら、必ずさうなつていらしつたであらう、今から思ふと、何と云ふ賢いお心がけでいらしつた

ことか、定めし父宮も姉上も、私をどんなに此の上もない愚者よと呆れておいでになるであらうと、面目なく悲しくお思ひになるのですが、今更何の甲斐もないことだのに、お恨み申しても仕方がないと、じつと辛抱して、何も聞かなかつた體にして過していらつしやいます。

宮は常よりも優しく、起き臥しにつけてしんみりと契り交して、此の世ばかりか來世までも變らぬやうにお約束をなさいます。さう云へば、おん方は此の五月の頃から、たゞならぬ體におなりなされて、ときゞ〳〵御氣分のおすぐれにならないことがありました。非常に苦しがりなどはなさいませぬけれども、いつもから見ると一向召上り物も進まず、横になつてばかりいらつしやいますのに、宮はまだそのやうなことに御經驗がおありにならず、たゞ暑い時分なので弱つておいでになるのであらうと、思つていらつしやいました。さすがに變だとお心づきになることもありまして、「ひよつと、どうかなすつたのですか。身重の人がさう云ふ風になるものですが」などゝ仰せになる折もありますけれども、御當人はたいそう極まり惡さうになすつて、さりげなく振舞つておいでになりますし、外に餘計な差出口をする者もありませぬので、たしかなことは分らないでいらつしやいます。八月になりますと、いよ〳〵幾日に御婚儀などゝ云ふ噂が餘所からお耳に這入つて來ます。宮はお隱しになると云ふのではありませぬけれども、云ひ出すのが心苦しく、お可哀さうにお思ひになりまして、云ひそびれておいでになるのでしたが、女君はそれをさへ心憂くお感じになります。もと〳〵内密のことでもなし、

世間一般に知れてゐることだのに、その日取をさへ仰つしやつて下さらないとはとお思ひになりますと、どうして快いことがありませう。宮もかう云ふ風にして引き取つてお上げになりましてからは、何か特別な御用がなければ、内裏へお伺ひになりましても殊更に宿直をなさらず、此處彼處で泊つていらつしやることなどもおありにならなかつたのですが、急にそんな風になつてはどうお思ひになるであらうと、心苦しくお感じなされて、それを紛らすために、此の頃はときゞ〳〵宿直にお上りになつたりしまして、今からぼつ〳〵馴らすやうに仕向けておいでになりますので、さう云ふなさり方なども、一途に薄情なやうにばかりお思ひになるのでした。中納言の君もお聞きなされて、たいそうお氣の毒にお思ひになるのでしたが、何を云ふにも、あゝ云ふ風な浮氣なお方でいらつしやるから、いとしくはお思ひになりながらも、きつと新しいおん方へお心がお移りになるであらう、れつきとしたお里方がついていらしつて、油斷なく眼を光らしておいでになつたら、その方へ縛り着けられておしまひになるから、つひぞ獨寢にお馴れにならない此方のおん方は、これから後は待ち明かされる夜が多いやうにおなりにならう、ほんにおいとほしい、などゝお考へになりますにつけても、自分は何と云ふ腑甲斐なさであることか、どうして此の君を人に讓つて上げたのであらうか、故大姫君をお慕ひするやうになつてからは、浮世に望みを絶つてゐた澄み渡つた心にも濁りが生じるやうになつて、偏にかのおん方のことばかりを、あゝのかうのと思ひつゞけてゐたものゝ、さすがにお許しがないうちに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c